



鍋谷鉄巳、小野喬の両氏

来能した鍋谷、小野両氏は能代駅で後援会、同窓生、各学校生徒、市民ら二万数千人におよぶ熱狂的な出迎えをうけた。小野選手は、オリンピック会場のヘルシンキで練習中、蓄膿症と診断され、一時出場が危ぶまれたのだが、その後の経過良好で、ヘルシンキ、オリンピック大会に個人四位と入賞を飾った。この両選手の功績を讃えて、十一月三日、文化の日に県オリンピック後援会の主催で、能代南高の校庭に記念碑を建立した。同碑は高さ四尺余りで、両選手が八月下旬に植樹した松を両側に建てられたものである。

### 十里競歩の復活

十里競歩が復活されたのも、この年である。戦前、昭和十三年の第一回を初めてとして十六里行軍を行っていたが中断され、戦後しばらく一万メートル競走をかわりに設けた。しかし、『学問とスポーツの両立』をモットーとする本校にふさわしい競技として再考され、さらに『十六里行軍の苦しかった思い出は人生にプラスとなった』とのべる先輩諸氏の働きかけにより復活されたものである。初期の頃のコースは、本校グラウンド―森岳―金光寺―志戸橋―松山―東能代―本校正門着であった。

## 第五章

昭和二十八年―現在

### Ⅱ 充実から飛翔へ

#### 能代高校に改称

昭和二十八年、能代南高校は能代中学以来、能代の中心的、代表的な学校として自他共に相認めるところまできたので、「能代高校」と校名改称しようという声があがった。ところが、この時能代北高でも「能代高校」と改称しようと相談している最中であつた。さっそく双方のP・

T・A役員が同窓会、職員

の代表で話し合いが行なわれ、北高も「南校が能代の代表高というなら、南校より十年以上もの長い歴史のもつ北高がもつと代表校にふさわしい」ということで譲らず、結局「昔から女性



東京五輪、バレー優勝の菅原選手

は北の方とか、北の政所などと「北」で呼称されている」という陳腐な論理？が功をえ、南高が能代高校と改称することになった。北校は女子校なるがゆえ、心がわりが早かろう？と急いで県に校名改称を申請し、ここに四月一日「秋田県立能代高等学校」が成立したのである。

この頃より高校進学の熱は急に高まりつつあり、本校の場合は普通教室が十三室で、もはや、図書室や音楽室を普通教室として使用しており、学校、P・T・Aが中心となつて特別教室の増築を要望し、翌年二月八日、理科室、音楽室、図書、書道室を増築竣工した。また、十月二三日には寄宿舎を柔剣道場に改築、「知幾堂」と命名された。

### 桧山に学校植林

昭和二十九年十月、県教育庁では学校施設用の用材は生徒が植えた林からと学校植林拡大推進運動五ヵ年計画を指導したが、能代市の場合は植林したくとも土地がなく、結局、机上のプランに終るのではないかといわれた。しかし、当時の桧山町と堀川村が学校植林のためなら喜んでということで、能代高校と能代北高は桧山町カニ沢の土地を提供されたのである。しかも、学校の取り分八、桧山町の取り分二という破格の契約であった。

本校では、三十周年記念事業の一つとして、全校生徒による植林を計画し、同年十一月二二日、全校生徒約七百名、同窓生二十名がバス、自転車、徒歩で桧山の崇徳小学校に現地集合し、赤松

千五百本、杉四千本を午前十時半から三時間足らずで植えおえ、桧山を緑の上にかえたのである。慣れぬ山仕事ゆえ、崇徳小学校に集合した時には下駄ばきでくる生徒もおり、そこで、船山仁先生等により下駄の緒を切られて裸足で山に入った生徒がいた。二九年から三五年まで増植し、現在では六町数反歩を植えつくし、もはや、建材として使用できるくらいに成長しているものもある。尚、この二九年四月、小林道一校長は宇都宮高校長に転任、加藤正一横手美入野高校長が新校長に就任された。

### 三十周年記念式の挙行

昭和三十年九月二三日、創立三十周年記念式が午前十時から講堂で盛大に挙行され、午後一時から中庭で祝宴が催された。翌日には、記念行事として、能代、山本地区中学弁論大会、郡市中学バレー大会、音楽祭、夜には演劇、音楽発表会、二五日は運動会が生徒全員参加のもとに行なわれた。また、書道、絵画、文芸、科学の展示会も本校校舎二階の教室で行なわれ、多くの能代市民が会場を訪れ、賛嘆の声をあげて帰っていった。



30周年記念、中学弁論大会

## 受験戦争の始まりと就職難

昭和二七年、「高校入学志願者は希望する高校に於いて受験し、一人一校主義として高校が主導権をもって新しい選抜方法を行なうべき」という高校側の主張に、郡市中学校長会が反対意見を述べているが、昭和三十年から学力検査前に願書を志願校へ提出し、選択科目も必修科目同様、可否決定の資料となり、高校入試がますます難かしくなった。それ以前の高校入試は本校と能代北高を会場とし、試験の内容もきわめて平易なものであった。昭和二十八年度の試験科目と試験時間を紹介してみよう。

九時三〇分～十時二〇分 国語・音楽

十時四〇分～十一時三〇分 数学・保健体育

十二時三〇分～一時二〇分 理科・職業家庭

一時四〇分～二時三〇分 社会・図画工作

五〇分で二科目をとき、主要科目には三〇分、音楽、保健等は二〇分ぐらいかけて解くようにという県教委の指示のもとに行なわれた。

進学希望者の増加とともに、高校入試の改革は能代市内で数百人におよぶ不合格者を出すことになり、中学校側は不満ながら補習体制を整えることとなり、いわゆる受験戦争の始まりとなったのである。

能代以来、能代、山本の優秀な生徒を集めてきた能代高校は入学試験の成績において、全く市内の他高校を寄せつけず、市内の

入試高点者ベストテンは、毎年、ほとんど本校生徒によって占められたのである。

昭和三十年十一月、県立日米文化会館で開催された秋大学芸学部経済学研究會主催の第五回全県高校討論大会には前年度優勝校の秋田商業をはじめ、八校が参加、『歴史の起動力は創造力にあり』とした本校チーム（佐藤博、大谷信雄、佐藤公厚の三君）が優勝した。また、三十一年四月、青森、岩手、秋田の三県合同テスト（一年生対象）において、本校は秋田高について全県二位、六月の東北大学学力コンクールにおいても秋田高について全県二位となり、学力や文化部の活動でその名を示した。

昭和三十～三十四年といえば、中学生、高校生の就職難はひどいものであった。多くの生徒が大学進学を希望する本校はそれ程でないにしても、能代工業高校や能代北高では、就職担当の先生が職場訪問し、求職依頼を行なっていた。ちなみに昭和三十年には卒業直前の二月においても、能代市内の就職希望の高校生四二六名中、八九名しか内定しておらず、事務系はほとんどなく、鉱山労働者、店員、配達員が主であった。今日、北羽新報等において能代市内の大学合格者氏名を掲載するが、当時、それと同じように就職内定者を紙上で発表したものである。

## スポーツ選手の活躍

こうした就職難の時代に、中学生たちは、いくらかでも技術を身につけて就職を有利にしようと、普通科の本校よりも工業高校

への進学を希望する者がふえた。

しかし、当時のスポーツ選手は就職においても花形選手としてほとんど影響がなかったのである。それは単にスポーツさえ熱心にやれば良いというのではなく、顧問の厳しい指導のもとに勉強においても努力した賜であったのである。

昭和三十年八月、バレー部は秋田県代表として全日本バレーボール高校男子選手権（姫路市）に参加し、武田重蔵先生以下選手十六名は一丸となって活躍、決勝トーナメントに進出、翌三十一年の大会（西条市）では宿敵藤沢高校をストレートで破り、優勝したのである。本校選手は東能代駅に到着後、トラック十台に分乗し、ブラスバンド、七夕ではやししながら、能代市民のさかんな歓迎をうけ、二百名以上の生徒による大提灯行列が行なわれた。この大会で、ジャンプ力91と92センチメートルを利用して大活躍した菅原貞敏氏（東洋レヨン）は、昭和三十五年、バレーボール世界選手権（ブラジル）のメンバーに選ばれることになる。

体操部においては、中村史朗先生の厳しい指導により、昭和三十年八月、新潟市で行なわれた全日本高校体操選手権で三年ぶり五度目の全国制覇をとげ、個人総合に田村一雄選手が優勝し、体操「能代」の名を再び全国に示した。同年の十月、第十四回国民体育大会においては、本校チーム（宮越千義、田村一雄、鈴木清重、平川文雄選手）を中心に結成された秋田チームが優勝し、女子においては、本校女子体操のホープ上田美鈴の活躍によって秋田チームが五位入賞の原動力となった。昭和三十一年、第八回全日本高校体操選手権が大阪市で行なわれ、団体優勝し、平川文雄、辻

健一選手がそれぞれ個人一位、二位に輝き、秋の国民体育大会（丘庄）においても本校中心の秋田チームが優勝した。この年、先輩、小野喬氏はメルボルンオリンピック大会で、鉄棒で金、鞍馬が銀、平行棒で銅メダルを獲得、個人総合二位に輝いた。この先輩の活躍は本校体操部に大きな刺激を与え、翌三十二年、秋田市で開かれた選手権大会では、団体優勝、辻健一（個人総合一位）三田久（同二位）、建部盛蔵（同四位）、金子正美（同十位）の能高選手全員がベストテンに入った。三十三年の大会では個人総合優勝した建部盛蔵、同五位、佐藤誠選手の活躍により、三十四年には個人二位の安岡泰彦、三十五年、個人三位の小林楠木、三十六年には個人優勝のの小野喬夫の活躍により、全国七連覇を達成した。

硬式野球部は、県北大会で活躍したが、全県大会においては、いま一步の感があった。しかし、個人的には、能代市内から、初めてプロ球団（大洋ホエリーズ）に入団した強打の田辺修選手（新十一）など優れた選手もあり、昭和三十三年六月、能高野球部後援会が設立された。



ローマ五輪ボートの水木選手

昭和三十三年に卒業し、東京大学法学部に進学した水木初彦氏は、ローマ・オリンピックのボート代表に選ばれた東大フオアクルーの一員としてオリンピックに参加した。

## 体育館の着工

昭和三十一年、三月二十日、市内畠町附近からでた火災はみるうちに能代市の住宅街に広がり、一夜にして千数百戸をなめつくした。この火勢のすごさは秋田や大館から望見されたそうである。能代市にとって、市の中心部の大半を焼失したことは財政的に苦境に追いこまれ、一般市民とて同じであった。このため、昭和二十九年十一月、在京能中同窓会が山崎五郎（旧三）、牛丸幸也（旧十九）、柳谷洋（新三）の諸氏等十人によって結成され、彼らの努力により在京学生寮を建設しようとする動きがあったのだが中止を余儀なくされた。しかし、能代市民の能代高校のスポーツに対する期待は大きく、昭和三十二年、鉄骨体育館（三〇〇坪）を着工する時、県会では二二〇坪しか認めず、それでは狭かろうと、能代市と山本郡は財政難の中から八〇坪分の建設予算を負担してくれたのである。

昭和三十三年四月二十九日の竣工式には日本体操の第一人者の小野喬、松森丈策、梶原義美選手、また当時の日本女子体操ナンバーワンの田中敬子選手等の模範演技がなされ、市民に讃嘆の声をさそったのである。

## 北高と合同の修学旅行

石原慎太郎が昭和三十一年に発表した「太陽の季節」は本校生

徒の間にかなりの人気を得、当時の愛読書第一位となっている。そして、「太陽族」と呼ばれる若者が出現することとなるが、生徒会活動はだんだん不活発となり生徒会役員立候補者の選出に苦労するようになった。

昭和三十三年九月十九日出発の修学旅行は、本校の男子生徒にとって最高の日であつたろう。乗客五百人以上になると準急程度の早さで走り、一般客は乗せないという特別列車がだせるので、交通局から、本校と能代北高の合同修学旅行の話があり、決定されたものである。当時の修学旅行は第一学年時に行なわれたが、喜んだ本校生徒はまだ夜の明けぬ三時頃からゾクゾク駅に集まってきた程で、四時二十分、臨時列車は出発した。しかし、期待に反し北高と本校の車輛は全く区別され、本校男子生徒はのどもかわかないのに各駅でおいて水を飲みに行き、北高生と会えるのを心待ちにしたらしい。

生徒の風俗としては、昭和三十四年頃から、学生帽の中に綿や手ぬぐいをいれて格好をつけるのが流行して、学校では禁止令を出したが、おさまらず、先生方が強制的に直させようと帽子を取りあげ、綿を取りだしてみたら、優にフトン一枚分の綿がでてきたという。当時は、「王将隊」と呼ばれる不良グループが県北地区を中心に、県の三大都市にはびこっており、そうした空気が学校内に流れてきたものであった。

昭和三十五年十月二十三日、本校吹奏楽部は仙台市公会堂で行なわれた全日本吹奏楽団体コンクール東北大会において、Bクラス（25人編成）高校の部に秋田県代表として出場し、課題曲「ス

カイウエー、随意曲「西部の人」をたくみにこなし、東北一に輝き、体操部の活躍とともに、「能高」の名をさらに高めたのである。

尚、昭和三十五年、加藤正一校長にかわり、角館高校長沖田領之助先生が新校長に就任された。

### 硬式野球部 甲子園出場

戦後のベビーブームの嵐が高校に押し寄せてくる前の昭和三十七年、学級増で一学年六学級となり、翌三十八年には、再び学級増で、今日のように一学年七学級となるのである。同年には独立図書館（建て九十四坪）が完成、三十九年一月には、木造二階建ての四学級増築工事が予算五〇〇万で完成し、今までのように特別教室（生物・物理）を並通教室に使用することもなくなった。

昭和三十八年八月、本校硬式野球部は初めて甲子園の土を踏んだ。第四十五回全国高校野球選手権大会は、記念大会のため、各県一校ずつとなり、みごと秋田県代表となった本校野球部は太田久監督の厳しい指導のもとに、大会屈指の好投手篠内政雄選手を擁し、甲子園にのぞんだのである。さっそく能代高校選手団が結成され、吉武栄司先生を団長とし、先発は高柳校長、熊谷忠一先生、野球部長の小笠原恒太郎、第二陣は市川嘉宏、近藤恒太郎、平野忠雄ら諸先生、本校の軟式野球部員、ブラバン、応援団などの生徒たちが甲子園にのりこんだ。八月十二日、西宮球場で一回戦が行なわれ、滋賀県代表の長浜北高校と対戦し、本校打線が十



昭和38年甲子園出場の硬式野球部

三安打をはなら、相手のエラーを誘って、前半三回まで十一点をあげ、十二対一で圧勝した。八月十五日には二回戦が行なわれ、岡山県代表の岡山東商業高と対戦し、前半は本校寮内、相手校鳥越両投手の好投で、スコアボードに〇の数字が並んでいたが中盤、相手に連打され、五対一で惜敗した。両試合とも、本校応援団、ブラスパンド、近畿地方に在住している同窓生、県人会それにわざわざ能代からかけつけた熱心な野球ファンの応援は、相手校が地元であるにもかかわらず、一步のひけもとらず、西宮球場応援席の最上段にかげられた「七夕灯籠」の絵と共に、観客のさかんな注目をあびたのである。

### 無念ノ連続出場ならず

甲子園出場を果たした野球部員たちは、甲子園の土をもつてくる

かわりに、甲子園出場の喜びを皆で分かちあうため、まだ応援してくれた全職員、全生徒に対する感謝の気持として、甲子園の花「夹竹桃」をもちより、学校に植えた。しかし、三十九年春頃から枯れはじめ、三本のうち二本が死んでしまった。残る一本の花は森岳温泉のゆりかご植物園でドック入りして小さな花を咲かせることができた。野球部員は、再び甲子園に出場し、もっと多くの夹竹桃をもってこようと猛練習をつむこととなった。

昭和三十九年五月、全県選抜野球の決勝戦において、能代工業高を破り、優勝し、東北六県高校野球大会に出場権を得た。この大会では一回戦青森商高を四対〇、準決勝は優勝候補の日大山形高を三対一、決勝では青森高校を四対〇で下して初優勝をかざった。

昭和三十九年といえば、十月、第十八回国際オリンピック大会が東京で開催された年であり、よって国民体育大会は六月に行なわれることになった。

東北代表として、新潟国体に出場した本校野球部は、一回戦に優勝候補の東邦高校と対戦し、三対二で勝ち、二回戦、博多工業高に二対〇と惜敗したものの、ベスト8に名を連ねた。七月、好投手渡辺節郎選手を擁し、甲子園大会県予選では危なげなく勝利し、甲子園連続出場は必至といわれた。しかし、西奥羽大会で、山形南高を倒しての代表決定戦、秋田工業高と対戦し、三対二で惜敗し、甲子園への出場はならなかった。この試合、二対一で迎えた七回表、本校は一死二、三塁で打者が左前打し、三塁に続いて二塁のランナーがホームベースに入るも、寸前でタッチアウト、

微妙な判定で、北羽新報に現存する写真ではセーフと見ることもでき、当時、この一点が入っておれば連続出場ができていたのかもしれないといわれたものである。

この三十九年、本校の定時制分校であった二ツ井分校が独立し五月二十三日、二ツ井中学校において小畑知事、伊藤教育庁を迎えて秋田県立二ツ井高等学校開校式が盛大に開かれた。

#### 四十周年記念式の挙行

昭和四十年は本校創立四十周年にあたり、九月二十一日には、学校祭、九月二十二日には四十周年記念式が挙行され、翌二十三日にかけて演劇、合唱、演奏会、展示会が盛大に行なわれた。記念事業としては、五月一日、学校玄関並びに生徒昇降口までの通勤、通学道路の舗装工事が完成し、記念樹（さくら九〇本）を植樹し、裏門も作られ、記念事業費は八十五万円、当時としては、かなり巨額の事業であった。

昭和四十一年にはグラウンド北側に付近の住民のゴミ捨て場となりつつあったので、境界をはっきりさせるため、境界壁が作られた。

翌四十二年には食堂が開設され、始め、利用する生徒は全体の十数%にすぎず、経営が危ぶまれたが、一、二年立つと、かなり多くの生徒が昼食として、あるいは弁当を食べた後でも利用するようになった。合宿所が建てられたのもこの年である。

また、四十二年は恒例の十里競歩が雨のため中止され、これ以

後、交通事情の悪化ということで、四十三年は白神山登山、四十四年は松山の植林地への遠足と三年間にわたり、中断された。しかし、苦しかったが、思い出の多い十里競歩、各関門での暖かいもてなし、ブタ汁の味、先生にハッパをかけられながら、眠い眼をこすりこすり歩いた道のり、ゴールインした時の喜び等々、中にはギターをかかえてゲタをはきながら参加した生徒もいた十里競歩を再開しようとする声は日増に高まって昭和四十五年の再開となったのである。

昭和四十一年、高柳校長は、生徒の個別指導の徹底、学業とスポーツを両立させた指導、環境整備のための学校づくり等の功績により、文部省より教育功労賞を受けた。

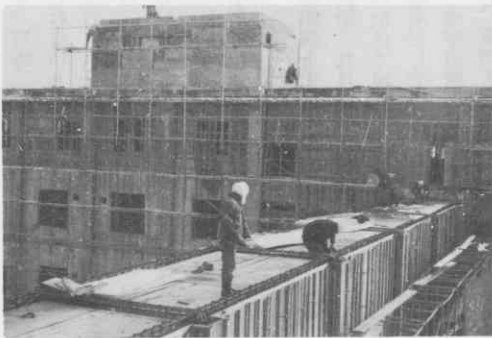
尚、昭和四十二年には高柳校長にかわり、高橋弥助先生が新校長として就任された。

### 校舎改築問題

クラブ活動は、昭和四十三年以降、軟式野球部が全県優勝した程度で成績ともに奮わず、顧問やクラブ員は勝つことより、まず第一に入部する生徒の募集に迫られた。

さて、昭和四十四～五年にかけて、P・T・Aの中では、新校舎建築の話がでてきた。そもそも昭和十九年の大火による焼失によって昭和二十三年に再建されたとはいえ、二十有余年の風雪に耐えつつ、すっかり傷んでしまっていた。能代北高は昭和四十五年、能代工業高は昭和四十六年に近代的な四階建ての鉄筋コンク

リートによる新校舎が完成し、当時、市内の高校では、木造校舎として、すき間かぜの吹きこむ校舎、吹雪のちらつく校舎として名をとどめていたのは本校だけとなった。それゆえ、P・T・A同窓会においても新校舎建築の話が強く出てきたのである。しかも、現在地は、増築に増築を重ねたとはいえ、当初から五〇〇人前後の生徒を収容すべく狭い土地（一万二千坪）であり、一〇〇〇人を超えた現在では、能中以来の樽子山に強い愛着をもつのではあるが、移転もやむを得まいという話も出てきて、校舎改築問題はさらに高まった。



工事中の新校舎

昭和四十五年十一月五日、能代高校校舎改築期成同盟会が設立され、会長には当時のP・T・A会長塚本義夫氏が就任し、副会長には同窓会長吉武栄一、能登直助、平川次夫氏らが選出され、昭和四十七年着工をめざして討議がなされた。当初、移転予定地としては人造の小高い丘に予

定したが、地盤軟弱のため、高埤地区の田園地帯の真中に決定した。二万七千坪に及ぶ広大な土地の買収にあたっては県や市、同窓生、P・T・A、あるいは柳土地改良区理事長藤田正夫氏らの尽力により、滞りなく進んだのである。

第一期工事は昭和四十七年十一月から始められ、普通教室が、四十八年度は第二期工事として特別教室、管理棟、四十九年度は第三期工事として体育館、セミナーハウス、陸上競技場が完成し、主要部分の工事は中田建設が担当、約五億五千万をかけた全館暖房三階建ての全県一を誇る近代校舎が誕生した。

尚、四十五年に就任した和田勝太郎校長は、昭和四十七年、学制百周年記念で教育功労者として、文部大臣から表彰をうけた。

#### さらば樽子山

樽子山を去ることになった昭和四十九年、その最後を飾るのかのように軟式野球部は好投手金田千秋選手の活躍で全県大会を制覇岩手、青森、秋田三県の奥羽地区予選も危なげなく快勝し、八月第十九回全国高校軟式野球大会に出場した。この大会は、「軟式の甲子園」とよばれる藤井寺球場で行なわれ、八月二十七日、二回戦で甲信越代表の相川高校を五対〇で降し、ベスト8に進出した。準々決勝で東京代表の江北高校に敗れ、ベスト4進出は逃したものの、樽子山の最後を飾るにふさわしい成績を残した。軟式野球部の活躍はさらに続いた。同年十日、その軟式野球部のメンバーは茨城国体に初出場し、二回戦、強豪平安高を三対〇で完封、



第19回 全国高等学校軟式優勝野球大会 '74

昭和49年茨城国体3位の栄冠に輝く軟式野球部

準決勝では九州代表の宇久高校と対戦、軟式野球史に残る延長十七回の死闘を演じ、二対三で敗れはしたものの、感激のあまり、高野連会長佐伯達夫氏が、わざわざ加賀正隆監督、久保田豪部長をグラウンドまで出迎え、強く握手を求めた程であった。全田投手は腕の痛みを注射で押さえての好投で、彼の不屈の闘志は「能高魂」を全国に轟かせた。

さて、十月二十八日、旧校舎体育館では、旧校舎に別れを告げる惜別式が全校生徒や多数の同窓生を集めて催された。晴天の中二十九日、三十日は全校生徒によって机、椅子、薬品等が運び出され、大型トラックがまるで能中以来の伝統はどんな小さなものでも残さないぞとばかり、何度も何度も往復された。トラックから荷をおろす生徒、



昭和49年10月晦日、校旗を先頭に樽子山から高・に向かう校舎移転  
パレード—晩秋の高・の地のすすきが美しい。

その荷を各教室に運ぶ生徒は、新しい校風の再建に燃えて力の限り、作業に当たったのである。思えば、校舎改築の話があつてから五年間、校長も和勝太郎先生（昭四五年四月一日～四八年三月三十一日在職）、阿部強先生（昭四五年四月一日～四九年三月三十一日在職）、鎌田宏先生（四九年四月一日～五十年七月二一日）と三人もの校長先生の尽力によってなされた大事業であつた。

十月三十一日、新校舎体育館で入舎式が挙行され、十一月一日から授業が平常通り行なわれた。

#### いざ／高墙健児

確かに、十月校舎移転する時、三年部P・T・Aからは受験にとつて大事な時に引越しては悪影響がでるのではないかという不安の声が聞かれた。この点については、当時、三年部主任の菊池忠一先生をはじめ、三年部の先生方が「補習体制の整備、強化」を呼びかけ、全職員の協力によって父兄の不安を取り除くことに奔走した。しかし、不安はまだまだあった。バイパスも完成せず、スクールバス問題も解決していないので、冬の冷たい吹雪による生徒の健康を心配している父兄もおつたし、生徒の欠席がふえるのではないかと心配する職員もいた。雨の中のどろんこ道はさすがに弱つたし、冬の北風の厳しさは言葉に言い表すことができないけれども欠席者は決してふえなかったし、遅刻者、早退者は激減した。また、先に述べたように、昭和四十九年度の卒業生は移転にともなう精神的、肉体的マイナスが受験に響くのではな

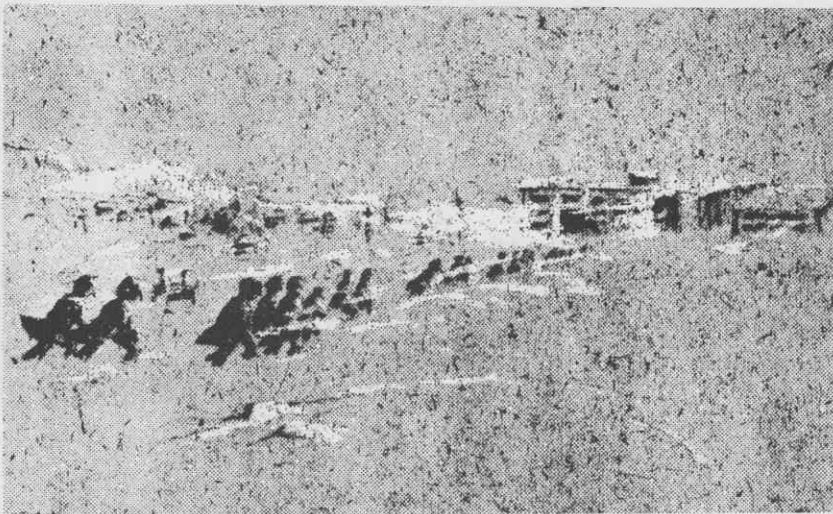
いかと心配されたが、国立大学合格者数をみれば、例年のほぼ二倍にあたる四十二名と好成績をあげたのである。

能高野球部に再び甲子園出場の期待がもたれた。県内屈指の剛球投手鈴木誠を擁し、強力打線で全県選抜野球大会に優勝、東北大会でも決勝に進出し、日大山形高に〇対六で破れたものの準優勝に輝やいた。しかし、七月に行なわれた甲子園大会県予選において県代表決定戦で、宿敵秋田商高と対戦、九対十三で破れ、その夢はたれた。しかし、たとえ、甲子園に出場できなくても、彼らの活躍は五十周年を迎えるにはふさわしいものとなった。

尚、七月二十一日、大事業であつた校舎移転問題の立役者である鎌田校長は、長く県で生涯教育を担当しておられたが、能代市の教育、文化の発展にどうしても必要と囑望され、能代市教育長に就任し、鷹巣高校長小林繁春氏が新校長に発令された。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
新校舎では、付属施設の工事を休む時はない。まだ若い、新生「高塩健児」は「松陵健児」の伝統をうけつぎ、再び輝かしい栄光を得んとして、今、出発する。

(荒川記)



バスも通らぬまま、高塩の地で最初の冬を迎えた生徒たちは、ふぶきに悩まされた。彼らは雪煙の彼方にかすみ、姿を消す自分たちの学校を「まぼろし城」と名づけた。  
—戸松恭一氏画—



昭和50年3月1日、高埜新校舎  
での、はじめての卒業式。



解体工事が進む樽子山の校舎